

スタンディングオベーション

中央区・中洲支部 川畠平一郎

1985年Leonard BernsteinはIsrael交響楽団を率いての日本公演で、Gustav Mahlerの交響曲第9番を演奏した。作曲者Mahlerがersterbend(死に絶えるように)と書き込んでいる第4楽章が終わると聴衆は感動し、アンコールの拍手、更にスタンディングオベーションと30分以上続いたという。

内田光子は2008/09 Berlin Philのアーティスト・イン・レジデンスであったが、その翌年2010年2月はBeethovenのピアノ協奏曲1番から5番まで全曲をSir Simon Rattleの指揮で演奏している。アプリ・Berlin Phil Digital Concert Hallではその全曲が視聴出来る。中でもピアノ協奏曲3番を聴いてみると、Rattleの指揮の下・内田の輝かしいピアノ演奏(特に神業)にBerlin Philの熱演・第3楽章が終わると、聴衆のアンコールの拍手は熱狂的で、遂にスタンディングオベーションとなった。既にオーケストラも去り鳴りやまぬ拍手・スタンディングオベーションの中、内田は深々と頭を下げて去って行った。

2006年9月東京・赤坂のサントリーホールで行われた内田光子のコンサート、2日目はベートーベンのピアノソナタ・最後に書いた30・31・32番ラスト3であった。ソナタ32番は荘重で暗い序奏で始まり、やがてワルツのリズムを取り入れ(当時ワルツは未だ珍しいリズムだったらしいが、内田の解釈によるとそれを超越したものに仕上げているという)、ワルツは少しずつ形を変えながら進み、やがて速い軽快なリズムとなり繰り返されて行く。

主題が強く弱く繰り返され、再び現れたワ

ルツのリズムも消え、第1楽章の回想もやがてEnding is silent(内田の説明)・沈黙の彼方へ消えて行く(川畠訳)、暫くの静寂・聴衆も固唾を飲む。内田はやっと立ち上がり深く頭を垂れると、感激の拍手・プラボーが沸き起こる。数回のアンコールにも内田は胸を押さえて固辞し去って行った。この劇的なフィナーレの後に何のアンコールもあり得ない事を内田本人はよく分かっており、聴衆も又納得であった。

COVID-19の為にコンサートが開かれず生の演奏を聞く機会が無くて残念だが、落ち着いて良いコンサートホールで名演奏が聴ける日が待ち遠しい。

